来賓挨拶

高知女子大学長　　木原　正雄

本日、多数御参集の上、第１３回高知女子大学看護学会総会と「人間の発達」をテーマに講演会が開かれますことを心からお喜び申し上げます。

去る７月９日、厚生省は昭和６１年簡易生命表を発表いたしました。この簡易生命表によりますと日本人の平均寿命は男子７５.２３才、女子８０.９３才となり、日本は世界一の長寿国になったということになります。しかしながら、寿命が延びたことは、はたして喜ぶべきことなのかどうか、老人の一人として疑問を持っております。といいますのは、寿命は延びたものの、老後はどうして生きるか？という問題があるからでございます。私共、老人にとりましては、ますます不安は大きくなってきているのが現実だからであります。東海大学の島田とみ子教授の調査されたところによりますと８０才台の老人のうち、寝たきり老人は約２０％、老人性痴呆は約２０％にも及んでいるといわれております。

ところがこのような老人の治療や収容する施設はどうでありましょうか。まことに寒いというのが現状でございます。特別養護老人ホームにも入れず、順番をまっている寝たきり老人は、約２万を数えるといわれております。実際にはもっとたくさんあるのではないかと思います。

今日、高齢化社会の到来ということがいろいろと問題になってきそおりますことは御承知の通りでございます。政府は昨年６月、長寿社会対策大綱をまとめました。全国に比較しまして、高齢化が10年程度先行しているといわれる高知県におきましても、さる２月「長寿県づくり構想」が発表されました。

しかし実態は、かけ声だおれの感なきにしもあらずと言えましょう。高齢者対策で何よりも必要なことは、老後を健康で不安なく多くの子供や孫にかこまれ、楽しい生活が送れるよう保障することであると思います。しかしながら、最近医療費の高額化、高い生計費、うさぎ小屋と言われる劣悪な居住環境、失業者の増大、特に年金のひき下げ、社会保障の低下といった現実は、特に高齢者の生存を脅かしておることは事実でありますし、このことが、とくに老齢者の不安を増大しているわけでございます。社会的な弱者であるといってもよい老人が大切にされない、又、大切にすることができない国が果たして、豊かな国といえるでありましょうか？

医療技術は進歩し高齢化社会の到来といわれます今日、人間の生命と尊厳とについて、考え直す必要があるのではないかと思っております。生誕から死に到るまで、学際的な見地から人間のあり方を考える上で看護学の占める位置は、ますます重要なものとなってきております。又、皆さん方の役割は、ますます大きなものになってくると思います。第１３回高知女子大学看護学会が実りある会となりますことを祈念し、挨拶とさせていただきます。